

図書館という劇場——夢見心地の円蓋から

中央図書館長 八角 聡 仁

1 世界のすべての記憶

毎年4月には「基礎ゼミ」の授業の一環として、新生に中央図書館の書庫を一巡りしてもらうことにしている。OPACでの検索方法など具体的な利用の仕方は必要な時に学んでいけば良いとしても、まずはそこに集積された知の厚みを物質的、身体的に感じとらなければ、つまり書物が単に「情報」ではなく、「体験」すべきものであることを知らなければ、何も始まらないと思うからだ。たかだか150万冊にすぎない蔵書（しかも本館で実際に目にできるのはその僅かな一部）だが、等身大をはるかに超えてひろがる知の空間に向けて、概ね乏しい読書経験しか持たない学生たちの目を多少なりとも開かせるには十分にちがいない。そこには誰一人としてすべてを踏破することのできないだけの本があり、おそらく未だ誰にもその価値を発見されていない本がある。少なくとも人文系における学びとは、この過剰な記憶の森のなかに迷い込み、あらゆる感覚を研ぎすませて渉猟し、そこから自分なりの何かをつかみとってくることに尽きている。

もちろん今日、書物の物理的な質感への愛着だけでは、知の媒介者として図書館が担うべき役割は到底果たしえない。誰もが言うように図書館をめぐる環境は大きな変動の只中にあり、電子ジャーナルや電子書籍の普及は言うまでもなく、情報のデジタル化は「グーテンベルクの銀河系」に根本的な書き換えを迫り、映像や音声も含めた新たなアーカイブの構築を図書館に要請している。物質性から解放された膨大な情報が世界規模で絶えず更新され、接続され、交換されるネットワーク

空間においては、もはや「本」という単位も解体し、必要な章や節だけを呼び出して再編成することも可能となる。情報の保管場所とそれを利用する場所が同じである必要もない。したがって、従来のような書庫と閲覧室から成る「場所」としての図書館は不要となるのではないか、そしてまた高性能化したサーチエンジンが専門的な図書館員に取って代わるのではないか、という議論も、すでに20年以上も前から繰り返されている。それらが皮相な問いにすぎないことも次第に明らかになりつつあるとはいえ、非-物質化、非-場所化した21世紀の「図書館」は、あらゆる書物=知識を収蔵するという人類の多年の夢を、ボルヘスの描いた「バベルの図書館」を実現しつつあるかのように見えなくもない。現にそれがグーグルによって企てられようとしているのは周知のとおりである。

空間的に閉じられ、物理的な限界を持った特殊な場所としての図書館は、無限に拡張する普遍的な知の総体に対して、その表象=代行としての「目録」や「索引」を組織することによって、特殊と普遍、有限と無限との調停を図ってきた。ひとまず本質的な問題は、その表象システムが（あるいはそれを支える歴史的隠喩や虚構が）デジタル・メディアの遍在化のなかでどのように変わろうとしているのか、あるいは、紙と活字に基盤を置いた人文的な知の制度と情報コミュニケーションテクノロジーとの間にどんな関係を見出すことができるのか、そしてそれにふさわしい図書館の空間構成とは何か、ということだろう。

経験的に誰もが知るように、たとえば一つ

のテキストが紙のページから液晶画面へと移しかえられるとき、それは厳密にはすでに「同一」のテキストではない。良い悪いは別として、形態の変化は内容と受容者との関係も変えてしまう（それはメディア論的な常識だろう）。ICTによる情報検索の利便性はいまや誰にも否定しえないし、コンピュータ上に電子化された書誌は、図書館と社会の関係にも少なからぬ変化をもたらしている。ただし、コンピュータ・ネットワークの「全能化」が、グローバルゼーションという世界認識と同様に、それ自体ローカルなものであることも忘れるべきではあるまい。

図書館とは、単なる書物の貯蔵庫ではないし、情報サービス機関であるだけでもない。人間がさまざまな自然現象や社会的営みから採集してきた知識や思考を、一つの秩序として組み立てようとしてきた欲望の「かたち」を記憶している場であって、今日の「ビブリオテーク（図書館）」から「メディアテーク」への変容（拡大）もその延長線上にある。それは個人の記憶がそうであるように、絶えず組み換えられ、生成しつづけているダイナミックな装置でなければならない。それを手軽に確かめるためには、たとえばアラン・レネ監督によるパリ国立図書館のドキュメンタリー映画を一瞥してみてもいい。まさしく『世界のすべての記憶』（1956年）と題された一篇は、巨大な知の要塞に向けていささかシニカルな視線も交えながら、その迷宮のような装置の作動ぶりを流麗なカメラワークで浮かび上がらせている。

2 樹木から木の葉へ

そのパリ国立図書館（現在はフランス国立図書館リシュリュエ館）のアンリ・ラブルースト設計による印刷物閲覧室で、80年ほど前に一人の亡命ユダヤ人が書き記した次のような一節に視線を投じてみたい。

パリのパサージュを扱ったこの著作は、丸天井に広がる雲ひとつない青い空の下

の戸外で始められた。だが、何百万枚という木の葉に、何世紀もの埃に埋もれてしまった。これらの木の葉には、勤勉のさわやかな微風がそよめくこともあれば、研究者の重い溜め息が当たり、若々しい情熱の嵐が吹き荒れ、好奇心のちょっとした空気の動きがたゆたうこともあった。というのも、パリの国立図書館の閲覧室のアーケードの上にかかる描かれた夏空が、閲覧室の上に光のない、夢見心地の円蓋を広げているからである。（ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論』N1,5）

ナチス・ドイツから逃れてパリに職場を定めたベンヤミンは、国立図書館に立て籠もって書物の森に深く沈潜しながら、同時に彼自身を包み込む空間へと意識をめぐらせる。「丸天井に広がる雲ひとつない青い空の下の戸外」とは、天窓を通して屋外の光が降りそぐ閲覧室のことであり、「何百万枚という木の葉」はそこでベンヤミンが参照していた膨大な文献資料を指しているだろう。著作の主題を集約する「パサージュ」（ガラス屋根のアーケード街）と同じ光学的特質を持ち、また同時期の建築であるこの図書館で、閲覧室の内部と都市の街路へと続く戸外の空間が浸透し、フランス第二帝政期に関する歴史的文献と、ファシズムが迫りくる現実世界とが通底するうちに、現在進行形で著しつつある書物がいつしかすでに埃に埋もれて瓦礫と化してしまう。その特異なメランコリーを胚胎した歴史感覚が、「木の葉」を微かに震わせる多様な空気の流れを描き分けていくこの鋭敏な批評家を「夢見心地」へと誘っているのである。「木の葉」とは単なるメタファーではない。紙の本の原料はパルプであり、つまり樹木であるのだから、木の葉のイメージは書物に触れる手の感覚と直接的につながっている。

国立図書館の丸天井に描かれた木の葉模様。その下でページを繰っていると、上でザワザワ音がする。（同上、S3,3）

ページをめくる身ぶりが奏でる風音を触覚的に受け止める身体に、さらに視覚と聴覚の交叉が起り、異質な記号と記号が響きあう。紙片を揺らす空気のとよぎとともにそのざわめきを感じするベンヤミンの繊細な身体感覚は、図書館という「場」の体験がどのようなものを改めて想起させるだろう。本を読む行為は物理的な環境と無縁にあるわけではない。文字から情報を受け取っているばかりではなく、言葉と物の関係を実践的に思考しているのだと言ってもいいかもしれない。読書の主体は、文字や図像から喚起される想像的世界（もちろんそれはフィクションに限らない）に半ば身を浸しながら、自身を取り巻く現実の空間と、手にした書物の物質的感触をも感じとっている。本を読む人の姿に心ひかれるものがあるのは（そういえば最近では電車内でもすっかり見かけなくなってしまうが）、その両義的、中間的な場に存在しているからだろう。たとえばアンドレ・ケルテスの小さな写真集『On Reading』に捉えられているのは、まさにそうした「あいだ」に漂う身体の魅力である。残念ながらスマートフォンを操作する身体には（今のところ）それが欠けている、といえは退嬰的なノスタルジーに聞こえるだろうか。

たしかに（当時から）古色蒼然としたリシュリュー通りの閲覧室とは異なって、近代的な機能空間としての図書館には埃など積もってはいないだろうし、天窓からの採光より効率的な照明環境が整備されているだろう。しかし、身体と空間が書物を介して感応する「場」の感覚は、デジタル・メディア時代の図書館にあっても（未だそれにふさわしいものとして見出されていないにしても）不可欠にちがいない。

そしてまた、ベンヤミンが描き出しているのは、きわめて現代的な様相でもある。いまや書物は無数の「木の葉」へと解体し、まさしく『パサージュ論』としてわれわれに遺された断章群がそうであるように、総合も体系化もされない断片化した知が、微風にそよい

で、まどろんでいるばかりだ。啓蒙主義のイデオロギーとともに発展した百科全書的な知の系統樹から、散乱する「木の葉」となった知のネットワークへと、21世紀の知的環境はまぎれもなく移行を遂げている。ベンヤミンがめざしたのは、枯葉のように堆積した微細な知の「かけら」を拾い上げて新たな連関のもとに衝突させ、そこに眠っている記憶を「夢見心地」から目覚めさせることだった。その覚醒の瞬間、十進分類法によって整序された空間に亀裂が走り、火花が散り、風が吹き抜ける。図書館を統べる知の秩序はそうした瞬時の出来事の連続によって更新される。やはり同じパリ国立図書館を仕事場としていたミシェル・フーコーがフローベールに触れながら、「図書館は火に包まれている」（『幻想の図書館』）と言ったのも、それに通じているはずである。

3 新しい公共空間に向けて

近畿大学では現在、東大阪キャンパス整備計画の一環として、その中心的、象徴的な機能を担う新しい図書館の建設が進められている。2017年4月にオープンする予定の新図書館が真の意味で「新しい」ものになるためには、最新のテクノロジーが提供する可能性を最大限に活用するとともに、そもそも「本」とは何か、「図書館」とは何であったのかを歴史的に問い直していくことが欠かせない。

たとえば「静かに勉強するための図書館」が成立したのはそれほど昔のことではないし、周知のように、多様な人々が集まる「議論の場」あるいは「知の広場」としての図書館を取り戻そうとする試みが、日本の大学においても近年さまざまに行われている。メルヴィル・デュエイによる十進分類法の創案（最初の出版は1876年）にしても、ヨーロッパ的な知の制度を平坦化して利用者を増やし、図書館を「大衆」に向けた開放的空間とすることを企図したものだった。「開放」というイデオロギーについては種々のレベルで検証が必要だとしても、図書館が現実社会と隔絶した知

の殿堂ではありえないことは、もはや当然の前提としなくてはならない。

電子メディアを通じたコミュニケーションが日常となった世界において、「場所」としての図書館は、単に書物を収蔵・保管し、情報を提供するだけでなく、いわばそれを「上演」することが求められている。書物よりもIT端末に接する時間のほうがはるかに多い学生たちにとって、いつでもどこにいてもスマートフォンの画面に呼び出すことのできる情報で「調べる」ことはたいてい済んでしまう（と錯覚している）のだから、「そこに行けば何かが起こる」という期待がなければ、わざわざ図書館に足を運ぶ理由を見出すことは難しい。従来の図書館につきまとう「真面目」なイメージを敬遠する学生にはなおさらだろう。研究者にしても、いまや自宅からインターネットを通じて世界中の図書館にアクセスし、多くの文献を閲覧・調査することもできる以上、図書館という「場」に求めるものは否応なく変わっていくはずである。

人と本が出会い、本を介して人と人が出会う場を演出すること、そして新しいスタイルを持った思考が準備され、上演される「劇場」となること。さしあたり新図書館の役割はそこに定位されるだろう。単にラーニング・コモンズを設置したり、賑やかなイベントを企画するといった発想を超えて、大学図書館を新たな公共空間として創出することだと言い換えてもいい。それはもちろん、「ツタヤ図書館」を大学に出現させることではない。アーレントやハーバーマスを改めて引くまでもなく、「公共性」についての議論は、現在の政治、経済、文化にわたって重要な争点となっているが、ひとまず公共の場とは、複数の価値や意見、異質な人々の「あいだ」に生成する空間である。その上で大学図書館には、大学ならではの公共性（単にオフィシャルでもコモンでもなくパブリックなもの）とは何かが問われることになるだろう。

新図書館の構想をめぐって山積している具体的課題に取り組む一方で、中央図書館とし

ては従来の図書館機能をより充実させていくことも重要な責務であり、とりわけ学術研究を支える体制がいっそう強化されなくてはならないことは言うまでもない。そのためにも、大学に集積している知を活かしたオープンな議論を促進すること、そして学内外に向けて中央図書館の活動とその理念をこれまで以上に積極的にアピールしていく必要があるだろう。創刊から30年を迎えたこの図書館報『香散見草』も、もちろんその重要なメディアの一つである。